

◆地域活動

介類生産者指導（中南部）

水産海洋技術センター 米丸浩平

1. 目的

介類養殖業者等を巡回し、指導および情報収集を行う。今年度は昨年度末にシラヒゲウニの種苗放流および種苗の港内飼育を行った渡名喜村漁協について、追跡調査を行った。

2. 方法と結果

シラヒゲウニ

1) 渡名喜

2月に放流したシラヒゲウニ種苗の追跡調査を6月6日に漁業者と実施した。

放流当初から、生息に適したような藻場が無く、生残率に期待が持てなかったが、全ての放流箇所周辺を探索した結果、ナガウニ、ガンガゼはいるものの、シラヒゲウニは1個体も見られず、想像以上に悪い結果だった。

一方、浮棧橋に吊るし、桑の葉を給餌して育てていたシラヒゲウニはこぶし大まで成長し、生残率もほぼ100%と非常に良好な結果だった。今後は、海藻等の付着物が目立つヒレジャコ養殖ケージへ掃除用として2、3個体ずつ投入し、産卵による新規加入がないか様子を見ることとした。

かつてはウニが沢山いたという東浜だが、近年は陸域からの細かな土砂の流入や、ウミガメが異常な密度で生息するなど、棲み処、餌ともに不足しているように思われるため、単なる種苗投入だけでは資源回復が見込めない可能性が高い。

2) 久高島

久高島で養殖（放流）したいとの相談を

受け、8月28日に当センターにて対応した。昨年度も別の方が来所し、情報提供を行ったが、その話に関連しての相談だった。

現在、島周辺にウニが全くいなくなったため、何とかして資源回復したいと考えているとのことで、現在、宜野座、恩納村で試験している親ウニ飼育による新規加入の取組を紹介し、ウニが増えるまでは禁漁を徹底すること、回復後の乱獲を防ぐルールを作ること等をアドバイスした。

シャコガイ

1) 座間味

4月20日～21日、座間味、阿嘉のヒメジャコ養殖業者を巡回した。座間味で垂下式を行う漁業者は垂下式を始めた1年目のものが出荷サイズに育ち、年3回と掃除をさぼりがちだったにもかかわらず生残率は約6割あったようだ。ほとんどは食害を放置したことによる減耗で、こまめにチェックすることで、ほとんどの減耗は防げるだろうとの話だった。

他の漁業者はダイビングや漁船漁業など本業が忙しく、養殖はほったらかし、あるいはやめてしまったとのことだった。

2) 喜屋武（糸満市）

11月1日、民間業者から、港川漁協と協力してヒメジャコ養殖を考えており、養殖現場を視察したいと相談を受け、喜屋武の養殖業者に視察受け入れを依頼した。

視察に同行し、話を聞くと、養殖業者が減っているためか、飲食店からの引き合いが強いらしく、出荷サイズの数が少なくな

っているとのことだった。

3. 考察

シラヒゲウニは全県で資源が激減しており、種苗放流を行う漁協も多いが、既往研究では生残率が非常に低く、実際に資源が回復したという話も聞かれないため、種苗放流以外の資源回復の手法を模索しているところである。漁協環境の悪化も資源減少の大きな要因と考えられることから、今後

の研究による原因究明に期待したい。

シャコガイ養殖は、現状では潜水器漁業や魚類養殖など他漁業と効率的に兼業することで利益を得ている事例はあるものの、主として行える漁業にはなっていない。そんな中、座間味で取り組み始めて3年目となる垂下式養殖は、最初に導入した種苗が出荷時期を迎え、採算性が見えてくるため、引き続き注視して指導を行っていききたい。

○渡名喜島



ナガウニと白いシルト



桑の葉で育ったシラヒゲウニ

○座間味島



ヒメジャコ垂下式養殖現場



垂下式のシャコガイケージ